

春日山窯跡の踏査

佐々木 達夫
(金沢大学文学部)

春日山窯跡の踏査

現在の石川県（旧大聖寺藩・旧加賀藩）という地域では、九谷村の九谷窯が廃絶後、江戸時代後期に再び九谷焼が始まったと言われている。金沢の春日山窯がそれである。春日山窯は京都の陶工・青木木米の指導で文化4年(1807)に始まり、文政元年(1818)頃廃窯となった。窯場の位置は江戸時代の絵図で春日社と善導寺の間に描かれており、およその場所は推定できた。昭和36年に建てられた木米窯址記念石碑が卯辰山公園線の道路際にある。しかし、具体的な窯そのものはすでに密集した宅地で破壊され、窯跡の発見は不可能であろうと思われていた。

九谷焼考古学研究会は2003年6月7日、小坂神社の西南部付近の住宅地を踏査し、春日山窯跡と推定できる場所を発見した。その成果は翌8日の北陸中日新聞朝刊第一面で同行した記者が報じ、さらに15日の文化欄にも改めてその発見の意義が掲載された。遺物発見届けは佐々木が金沢東警察署を通じて金沢市教育委員会に届けた。

発見した場所は、山麓下の平地を走る城北大通りから山の上交差点で卯辰山公園線を東に登り、小坂神社石段下の地点で南に曲がり、さらに60mほど登った地点の西側である。住宅が密集する傾斜地で、狭い道は舗装されて地面はほとんど見えない。しかし、狭い路地の一部に未舗装部分があり、そこで窯跡部材や匣鉢等の窯道具類を採集した。陶磁器片も少数落ちていたが、いずれも生活用品の破片と思われ、春日山窯廃品と断定することは出来ない。採集した色絵碗片にも使用痕が残っていた。

江戸時代に卯辰山の一部にあたるこの地点は春日社にちなんで春日山と呼ばれた。春日社は720年に奈良春日大社の分社として創立され、一揆によって焼失したが1636年に前田利常により現地で再興された。1874年に小坂神社と改称した。春日山陶器場が置かれた当時は加賀国河北郡山ノ上村であったが、明治大正時代に石川県河北郡山ノ上村、河北郡小坂村などと変わり、現在は金沢市山の上町10という地番になる。

春日山窯を描いた絵図

絵図「春日山陶器場所図」には春日社の右側に陶器場が描かれている。窯場の中央やや左によって、燃焼部と8室の焼成室をもつ関西系連房式階段状登窯が描かれる。窯は小さなマウンドを築き、その斜面を春日社の方向に登る。周辺には建物がいくつか並ぶ。上方には左から匣拵所、細工所、画付所が並び、右方には色絵窯の明炉と暗炉、土小屋、薪小屋が並び、下方には右から土水干製所、場所番人小屋、井戸、鎮守が並んでいる。場所番人小屋の下方には山之上村に下りていく通路が描かれている。右側は善導寺、左側は春日社の参道となり、上方には山並みが描かれている。

ここでは3枚の絵図を示した。いずれも基本的内容は類似している。金沢市立玉川図書館が所蔵する絵図「春日山陶器場之図」は色絵窯の描き方等がもっとも詳細であり、元の形がわかるように筆写している。木村弘道（「青木木米と春日山窯」『金沢美術工芸大学学報』6:1-22, 1962年）が掲げる絵図は、前田家原本の古い写しと木村が推測しているが、筆写された色絵窯もやや雑になる。和田文次郎（金沢市役所編『稿本金沢市史工芸編第1』1925年。1973年、名著出

版、復刻)が掲げた絵図は細部の筆写がかなり雑となり、精度が低いものである。しかし、建物等の配置や描かれた内容は同じである。最初に描かれた絵図は前田家が所蔵していたものであろうが、この3枚の絵図は江戸時代の原因ではないと思われる。

春日山窯の開窯を伝える文書

春日山窯の開窯について記した古文書は2つある。加賀藩士富田景周が文化4年10月に記した「箕柳祠碑文」、加賀藩士津田政鄰(左近右衛門)が記した「政鄰記」の文化5年4月18日の条である。いずれも良く知られた古文書である。「箕柳祠碑文」(文化4年)に、当時金沢にあった大樋や晁野は軟質で日用に耐えず、それにつけ込んで肥前唐津今里や京清水から藩内に送り込まれる皿は36、7万枚を下らないとある。そのために加賀の地で陶磁器生産が始められることとなる。

「政鄰記」の文化5年4月18日の条(金沢市役所編『稿本金沢市史工芸編第1』1925年や松本佐太郎『定本九谷』宝雲舎、1940年の所収文を参照した)には、春日山窯を開く経緯が記され、陶土や薬土の採掘地の記載もある。金沢町奉行に金沢町年寄の亀田純蔵が提案した「唐津金府起本」と題する「具申書」を採録したものである。「唐津金府起本」の内容は現代語に訳すと以下のような内容となる。現代語訳にあたって、金沢大学文学部日本史講座中野節子教授のご指導を得た。

「前々から金沢には大樋等に楽焼類はあったが、唐津今里(伊万里)のような堅焼はなく、日常雑器の品はすべて他国から入ってきた。遠路の運送で駄賃などが加わり、他国に払う銀高は年々積もって過分のこととなった。

近年尾州(尾張)等でも焼物窯を企て、最初は不十分(量が少ない)だったが、しだいに手に入るようになり、追々宜き(質が高い)器物ができるようになり、永久の国産になった。そのため、國中職人工商など賃金の低い者に至るまで、この焼物で生活の糧を得るものが多い。

去々年、町会所が相談し、金府(金沢)にも右の品(瀬戸と同じ堅い焼物)を国産とすることが出来れば、年々無際限に他国に漏れている金銀が当府に留まり、とくに貧しい者も賃仕事に就けるので下々も潤うことである。

そこで京都の粟田口陶器師青木佐兵衛という者が陶器のことに詳しいので様子を聞いたところ、陶器に適当な土があれば国産ができるということで、去々年寅年9月に佐兵衛を当府に呼び、先年陶器を作っていた大聖寺九谷の土を取り寄せ、当府茶臼山の土を主として、卯辰山瓦師平兵衛が所有する瓦窯で少し試しに焼いてみると問題なく出来た。帰京していた佐兵衛(木米)を再び去年4月に(金沢に)呼び出し、近山から次第に良い土が出るようになったので、山之上村で中絶していた瓦窯3カ所の地面を引き受けて、陶器窯を造った。ところが去秋は雨天が続いて土が乾かず、11月になって初めて焼いた。新窯のため土から湿気が抜けていなかったが、南京焼(染付、磁器)に似た品も出来た。相公様(前田治脩)にご覧頂くと好まれて品々を仰せ付けられ、年寄の内からも注文品があった。窯も乾き職人も追々手が馴染んで、必ず国産に成るから、上品はともかくとして日用の皿鉢類雑器などは、他国より取り寄せるに及ばず、当府で需要に応じることが可能である。九谷の土を取り寄せるのは遠方なので費用がかかるから、その代わりとなる土を探したところ、能美石川の両郡の山で土が見つかり、九谷から取り寄せる必要がなくなった。領内に沢山ある薬土などの出るところは以下の通り。

能美郡瀬木野村、勘定村。石川郡別曾村、三子牛村。河北郡山之上二俣村、卯辰村。これら

は白き石にて、南京焼に似たものを焼く土に加える。

薬土の分について。瀬木野村土中から出る白石は薬に用いる。三子牛村別曾村土中から出る塊石は薬に用いる。卯辰村土中から出る塊石は薬に用いる。窯場内から出る赤土は薬に用いる。

薬を解かす灰の分について。椿の灰、松の灰、これは落葉を用いる。竹の灰、これは桶職人が細工に使った屑を用いる。堅木の灰、之は紺屋が使った灰の垂を用いる。堅炭灰、これは湯風呂屋が使った炭の灰を用いる。

この他、粉具は紅柄、緑青、唐の土、硝子の粉を呉州藍絵に用いる。

右の通り、今度用立てした土薬共すべて国産であり、そのうち良い土が出ることになればそれを用いる筈である。」

以上が「唐津金府起本」の現代語訳内容である。

春日山窯を開窯させた理由

「唐津金府起本」は流通グローバル化の時代には不向きな内容である。市場競争原理がすでに導入され全国的な規模で良い物が安く買える江戸時代に、他国製品の不買方針を明確にした申請を加賀藩は採用した。外の物を買わないために内部で作る。その材料も国内で間に合わせ、外から買わない。地域の人々の安定した生活基盤を支える産業育成の重要性や、新たな地場産業による雇用拡大を訴えて、新規産業創成策を打ち出したのは現代に通じる経済政策の一つである。

地方分権を推進し、特定の地方あるいは地域一カ所に特定産業を集中化させず、同じ種類の産業を各地単位で開拓する。つまり同じ手法を使った同じ産業の地域興しの実施である。地域ごとの活力ある社会を発展させるための新規産業興しであるが、他国同種産業との競合は避けられない。

普通は捨てる廃品や不要品までうまく利用し、地元材料調達率百パーセントで日常生活の必需品を造る企画を最後に付け加えている。決して一級品を造るとは言わず、二級品を手近な物で造るという、胸が締め付けられるような切羽詰まった申請書である。志だけは感じるけれども、どこか慎ましい侘びしさを伴う自給自足案である。流入してくる有田の磁器を食い止めるのに必死で、自らの製品を藩外に売るとは提案していない。考える余裕もなかったのだろう。加賀藩の役人、つまり県庁職員担当者はこの案を受け入れたとも言える。同様の政策や考えが江戸時代後期の日本各地で採用され、北海道をのぞく各地域に生活用品としての焼物を作る窯が林立した。その結果は全国的な地方窯の成立と町人農民に至る生活文化の向上、そして数十年内に数千の窯が廃絶する日本近代の産業革命につながっていく。

春日山窯の製品

卯辰山は茶臼山とも呼ばれていたが、その山の各地に今でも黄色の陶土が地表面に見える場所がある。江戸時代後期から陶土が採掘されたが、金沢卯辰山工芸工場の戸出雅彦氏は工房に近い地点から陶土を採掘し、その粘土で赤褐色素地の堅い陶器を焼いている。

金沢卯辰山工芸工場は春日山窯製品と推定できる色絵陶磁器を多く収集している。そのなかには木米好みと言われる呉州赤絵写しの鉢や皿、向付、それに青磁の鉢や木米の印がある如意などがある。鉢と皿の素地は白色磁器であるが、陶土を混ぜた半磁器と言える鉢もある。向付は陶土を使用している。釉は透明釉であるがやや灰白色がかかるものがあり、鉢や皿の内外面に色絵・上絵が描かれている。底部裏に赤色顔料の上絵で記された銘は、金沢市内の出土品など

も加えると、木米、春日山、金城、金城製、金城御製、金城春日山、金城製春日山、金城文化年製、文化年製、金府、金府造、四角枠内に福（角福）、等が知られている。この他に、金城新製、金府新製、金陵、金陵辺、加陽製、金城東山、帝慶山、等の銘もあるという（金沢市役所編『稿本金沢市史工芸編第1』1925年）。赤絵の銘には後世のものも含まれるか。もちろん無銘の焼き物も多いだろうが、春日山と認定するためには比較資料としての窯跡出土品が必要である。

銘があるため春日山の製品と言われる鉢や皿を見ると、少し首を傾げる。偽物と言うのではなく、その質に対してである。大鉢の歪みはひどい。割れた磁器片の一部が付着したままのものがある。色絵を描いた白磁の釉が縮れている。器形は厚ぼったい。繊細あるいは洗練という言葉からはほど遠い。二百年ほど前に中国で流行した明末清初の焼物の写しが多い。中国では五彩、日本では呉州赤絵と呼ぶ色絵の写しである。中国でもこの手の焼物は釉が厚くやぼったい民間用であり、景德鎮の一般的な製品よりも質が劣る。それをさらに下手な技術で作ったと感じさせるものである。日常生活雑器を目標に置いていたが、有田磁器の水準に達することができず、茶道具にも活路を見いだせなかったのだろうか。

春日山窯の製品は金沢大学宝町遺跡（金沢大学医学部附属病院地点）の与力町跡からも出土している。江戸時代の与力の屋敷跡である。ややくすんだ感じの染付小碗がある。高台断面は四角形で繊細さがなく、底部下面に染付で金城文化年製と3行に書かれた文字から、春日山窯の染付碗とわかる。文字はいかにも下手である。外面には草花文、内面中央部には一折の草花文が描かれる。同じ器形、文様で金城文化年製の同じ書体の文字が書かれる染付碗は、1991年に金沢市教育委員会が発掘した安江町遺跡出土品のなかにもある。1992年に金沢市教育委員会が発掘した下本多町遺跡からは内面中央に金府製と書かれた鉄絵磁器碗が出土している。金沢の町中に出回っていたことがわかる。遺跡出土品を見ると、春日山窯の製品は日常生活用品が主であり、青磁や染付が多かったと思われる。しかし、春日山窯として一般に知られる製品は赤色を主とした色絵鉢であろう。そうした色絵鉢は金沢大学宝町遺跡からも出土している。全体に赤色が目立つのが特徴で、内面に魁の文字を書いた鉢もある。色絵もやはり鉢や碗が多い。染付を主とする日常生活用品を作り、有田の染付が流入するのを防ごうとしたことは出土品からもうかがえる。

春日山窯の廃止

真剣な意見が加賀藩に認められた春日山の開窯だった。しかし、金沢に悲劇が起こった。開窯の翌年文化5年正月、藩主が住んでいた金沢城二の丸炎上を誰が予想したことだろう。1970年代の金沢城二の丸跡発掘で筆者もその火災跡を焼けた礎石や焼土と化した当時の地面で見た。出土した陶磁器片には焼けて熔着したものもありひどい火災であったことがわかる。

莫大な再建費用の捻出、緊縮財政、そして焼物を造るための藩費は削られ、春日山は藩窯から民窯となった。突然の災難や財政危機、いつの時代にもある。民で出来ないことでも民で、官の都合で制度は変わる。藩は企業立ち上げ時と儲かる最中には援助したが、自らの都合や経営が傾きかけたときに手を引くのは早かった。町会所の出資も年賦償還に改められた。この年の冬、木米は環境悪化、おそらくは賃金カットのために京都に去る。頼みの綱であった木米の弟子、本多貞吉も3年後の文化8年、新興の若杉窯に引き抜かれた。若杉は有田に匹敵する良質の染付を量産し、経営の良い若杉にたいして藩は援助を行った。貞吉が若杉に移ると春日山窯はさらに衰微し、しばらくして文政元年頃廃された。給料の一部カット、社員の引き抜きと

リストラ、そして遂に会社そのものの倒産。春日山の存在期間はわずか十年ほどであったが、波瀾万丈であった。雇用されていた職員の家族は、どこに散ったのだろうか。そして窯はどうなったか。当時の状況を知る方法の一つは窯跡の発掘である。

春日山廃窯の翌年、文政2年(1819)の「産物方役所達書」に他国焼陶器の船積みを取り扱うとその品を取り上げると記される。能美郡若杉村(今の小松市)の若杉窯で磁器生産に成功したため、来春から他国入り石焼陶器を差し止め、若杉焼を藩用品とする方針を打ち出している。公権力で商人中心の日本海広域流通を阻止する策略である。それでも他国とくに有田染付の流入は止まらなかったようである。江戸時代後期の金沢市内の遺跡から出土する食器類はほとんどが有田製であり、次いで京焼の碗も散見できる。若杉窯の染付は有田染付よりも明らかに少ない。

他国産の陶器が港に入ることを差し止める命令が出されたが、文政11年(1828)の「御算用場達書」では、今年に限り輸入禁止令を解き、三倍の銭を取り立てるという。命令に従わない商人がいかに北前船で活躍していたかを示し、現状を変革できない役人の苦渋が知られる。果たして関税率を上げて輸入を少なくする方針は成果を挙げたのだろうか。1973年夏に若杉窯跡が発掘調査された。筆者もその発掘に参加したが、窯跡付近から出土した染付の破片や色絵片は有田染付と比べて見劣りしない出来であった。それでも発掘された町跡からの若杉染付発見量が少ないのはどうしてなのだろう。個人の好みか問屋制度と流通の問題があったのだろうか。

日本海側地域の繁栄を支えたのは二千年に渡る沿岸貿易と対岸交通である。江戸時代は北前船という動く総合商社の活躍が北陸を含む日本海側の生活文化向上の基本であった。津々浦々で物を売り買いする民間の行為を公権力で否定し、それに伴う情報交換や文化交流を止めるのは、自らの文化的基盤を失うに等しい行為であったと思う。殖産興業という政策は一人勝ちの地域にとっては問題ないが、その他の地域にとっては財政的援助を伴う保護政策が付きまとい、いつまでも継続できるものではなかった。春日山が廃窯となり、若杉が苦戦したのも同じ理由が背景にあった。

陶磁器生産の継続

春日山窯の復活を試みた人もいた。文政5年(1822)、加賀藩士武田秀平(号民山)は春日山窯の廃止を惜しみ、自ら新たな窯の経営を試みた。春日山窯よりも質が良い焼物が造られ、藩内を超えた流通に成功した。江戸の加賀藩上屋敷跡からも民山窯の赤絵碗が発掘で出土している。しかし、弘化元年(1844)に民山が没するとこの窯も廃された。民山窯の錦窯は里見町の自邸に築かれ、絵付も自邸で行われたという。しかし、秀平の春日山の持地に本登窯を築いたかどうかは不明瞭である。今回の踏査による春日山窯跡の再発見が本当に春日山窯跡であったか、あるいは民山の窯跡であったか、あるいは他の窯跡であったか、という問題はまだ残るようである。発掘して出土品を見れば、この問題は解決できる。今回踏査した地点で春日山の窯跡を発掘することが、民山の窯跡確認にもつながる。地域文化の再発見と史実の究明のためにも、近い将来に発掘調査が必要であろう。

藩が財政援助するのは成功している最中が多い。無償援助ではなく儲けを狙った援助であったか、あるいは地域の仲間意識あるいは他国敵視意識のためであったか。焼き物産業は他の産業よりも短期間で廃れたようである。有田や京都、瀬戸の陶磁器との市場競争、そして火を使う危険性を伴う産業であったことが理由の一つであろう。春日山が廃絶に追い込まれた理由の一つとなった若杉窯も火災で潰れ、八幡に移転している。

その後、何度も繰り返し焼物産業が金沢で復活し、そして潰れた。人々の慎ましい志の高さ、そして実際の経営や運用の困難さ、思いがけない災難、さらに新たな人々の懲りない再挑戦。疲れたときに元気が出るような、違う人々が入れ替わり立ち替わり繰り返す同じ努力の歴史の一端をここにも見ることができる。

春日山は再興九谷か

春日山窯は九谷焼の再興と言われる。しかし、それに反対する意見もある。九谷窯が廃絶された後、春日山が築かれるまで約百年の期間がある。この期間内にも加賀藩で焼き物は焼かれていた。春日山窯が築かれた当時の金沢には楽焼を焼いた大樋や晁野があったが軟質で日用に耐えず、そのため肥前唐津今里や京清水から藩内に送り込まれた皿は36、7万枚を下らないと「箕柳祠碑文」（文化4年）に記される。春日山も当初は瓦窯を利用して製品の試し焼きをした。楽焼きや瓦は金沢でも焼かれていたのである。しかし、有田と同じような硬質の焼き物はなかった。春日山で試し焼きをしたときの土は九谷から取り寄せたものと、地元の茶臼山で採った土を用いている。九谷をよく知っていたことは明らかである。

九谷にとっても春日山にとっても、有田の磁器と色絵の存在が開窯に関わる中心的な問題だった。九谷の場合、有田で磁器や色絵が成功したため、その影響から九谷で焼き物を始めることとなった。春日山の場合、有田から大量の磁器が藩内に流入したため、春日山で自前の焼き物を始めざるを得なかった。九谷では新たに発見された九谷近隣の土を使って焼き物を焼いた。春日山では当初九谷の土と春日山近隣の土を使って焼き物を焼いた。春日山も九谷に窯があったことを意識して始まった。

こうした状況とその後の九谷焼の展開を考えると、春日山窯を再興九谷の最初の窯と呼んでいいだろう。しかし、春日山窯より17年後の文政7年（1824）に開窯した吉田屋窯を再興九谷の最初と呼ぶ人がある。その理由の第一は九谷の地に窯を築いたこと、第二は塗埋手の青手九谷を再興したことであろうか。

吉田屋は九谷の復興を目指し、九谷という伝統の地に窯を築いたが、九谷焼そのものはすでに地域内に焼き物産業として興っていたと言うほうが現実的であろう。吉田屋はすぐに九谷から撤退し、大聖寺に近い山代に生産拠点を移動した。吉田屋窯が築かれた当時、周辺地域にはすでに春日山窯の技術系統を引く若杉窯などの窯場があり、そこからも吉田屋窯創成に関わる職人が参加している。そうした状況で一人吉田屋窯のみが九谷の再興と言うのは無理であろう。

4代目・豊田伝右衛門（屋号吉田屋）の芸術的趣味が羽ばたいたのが青手九谷の復活であろうか。春日山窯も京都の名工であった青木木米が春日山で芸術的作品を作ろうとしたことと同じことと言える。実際には吉田屋窯も春日山窯も日常生活品を多く作ったし、そうせざるを得なかった。個人の趣味の部分は僅かにして、有田を意識した大量の日常生活用品の生産に主力を注いだのである。春日山窯も民山窯も多様な色絵を作ったが、赤色を主としたものが多く、若杉窯は有田に似た製品を作っている。吉田屋窯が青手九谷を作ったのは、有田初期色絵を九谷製品と伝右衛門が勘違いした、あるいは当時の人々が加賀に多く伝わる青手九谷が九谷産だったと勘違いしたためであろうか。

有田は初期色絵に次いで17世紀末には柿右衛門様式の色絵が広がり、さらに他の様式の色絵に変化していた。江戸時代後期に、すでに途絶えて長い期間が過ぎていた忘れられた色絵様式を復興し、その芸術性を高めたことは歴史的評価を受ける事跡であるが、再興九谷の祖と呼ばれることとは次元の違うことである。古九谷と呼ばれている色絵は商品であったから産地の有

田には残らず、文化の高い大消費地の加賀に多く伝えられていた。古九谷は有田外山の山辺田が主要産地であったため一般の有田磁器の白色素地と違い、素地が灰白色であったことも有田と認識されなかった理由であろう。1972年から始まった山辺田窯跡の発掘調査には第1次調査から私も参加し、有田で延べ数年を過ごすことになったから思い出が多い。発掘調査もなかった江戸時代後期に、伝右衛門が勘違いしてもけっして笑うことはできない。九谷焼の代表的様式を作り上げた吉田屋の功績は大きい。

宮本謙吾（『九谷焼研究』学芸書院, 1935年）は九谷焼とは江沼郡の九谷と山代で出来た焼き物の名称で、その他は九谷焼ではないという。江沼郡は今の加賀市と山中町である。松本佐太郎（『定本九谷』宝雲舎, 1940年）は春日山が金沢・能美・江沼の九谷焼の始まりという。すでに古くから九谷伝統の継承者や再興九谷始まりの名誉の取り合いがあった。21世紀の今日、加賀国・石川県で現在も焼かれている焼き物の歴史を語るとき、吉田屋窯を再興九谷の最初の窯とするのは、難しいのではなかろうか。小さな地域あるいは個人の意識とは反する場合があるが、外部から見れば石川県内の焼き物は九谷あるいはその系統、同じ地域内の焼き物と見えるだろう。江戸後期から焼き物に関わった人々のつながりは絶えていない。その後、青手九谷に似た製品も作った人々は蓮台寺窯や松山窯などにいたが、赤色を主とした色絵が再興九谷では一般的であった。明治時代以後も有田に似た色絵と青手九谷に類するものが、時代の波に乗って流行り廃りしている。青手九谷ではなく赤色を主とした色絵や染付、陶器も作った春日山窯を、19世紀前半の加賀では築窯年代がもっとも早いから、再興九谷の最初の窯と言っていいだろう。

こうしたことを認めたとしても、まだ問題は残る。九谷があった大聖寺藩内には吸坂もあり、ほぼ同じ時代の焼き物である。九谷焼ではなく吸坂焼でもよかった。今の石川県という地域内の焼き物の名称として江戸時代末から明治初には九谷焼という名前が定着したのも歴史的事実である。この背景には古九谷に対する当時の人々の思い入れが感じられる。現代の陶芸家は自らの作品を九谷焼ではないと思っている。それらを九谷という枠内に位置づけるかどうかも問題であり、木米と春日山を別の窯とする考えにも似ている。木米は九谷焼であったか、再興九谷の祖と言ってよいかという問題である。春日山窯製品の銘のうち金城、加陽、金陵、金府は金沢を指し、春日山、金城春日山、金城東山、帝慶山は春日山を指す。これを見ると春日山は金沢の焼き物である。焼き物は古代・中世にも今の石川県地域で盛んに作られていた。それらと九谷は直接的な系統が見られず、中世末で焼き物の系統は消えていた。越前などの中世窯が近世になっても越前と呼ばれたことと異なる状況である。堅い焼き物の他に軟質の施釉陶器は春日山以前からあった。大樋焼等を九谷焼とは別系統として、九谷焼と呼ばないのが通例であるが、これは京焼がいつ始まったかを話題とする時の状況と類似している。こうした問題があっても、やはり今は春日山を再興九谷と呼ぶことにしよう。



金沢市山の上町に残る春日山窯跡のレンガや窯道具が発見された場所。卯辰山の北部は春日社（小坂神社）があるため、春日山と呼ばれ、文化年間から文政初に春日山陶器場が置かれた。九谷村の窯が廃窯後、約百年の空白期間において再び陶磁器が焼かれた窯として知られる。春日山窯は再興九谷の最初の窯とする説が一般的であるが、九谷再興を目的としたのは九谷及び山代の吉田屋窯とする考えもある。京都から青木木米が呼ばれ、本多貞吉、越中屋平吉、任田屋徳右衛門らが製作に従事した。

匣鉢片

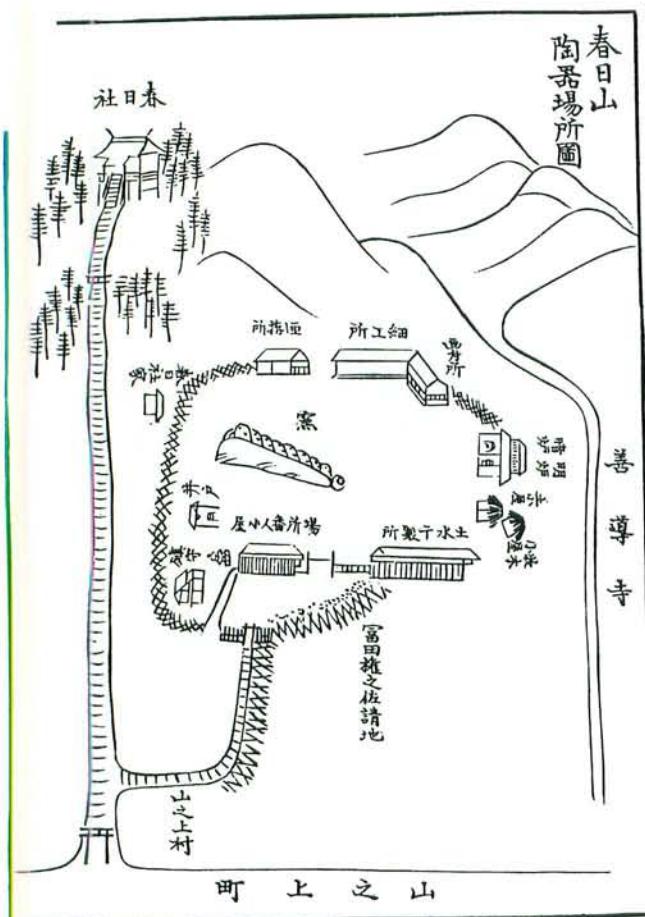


窯道具、レンガ

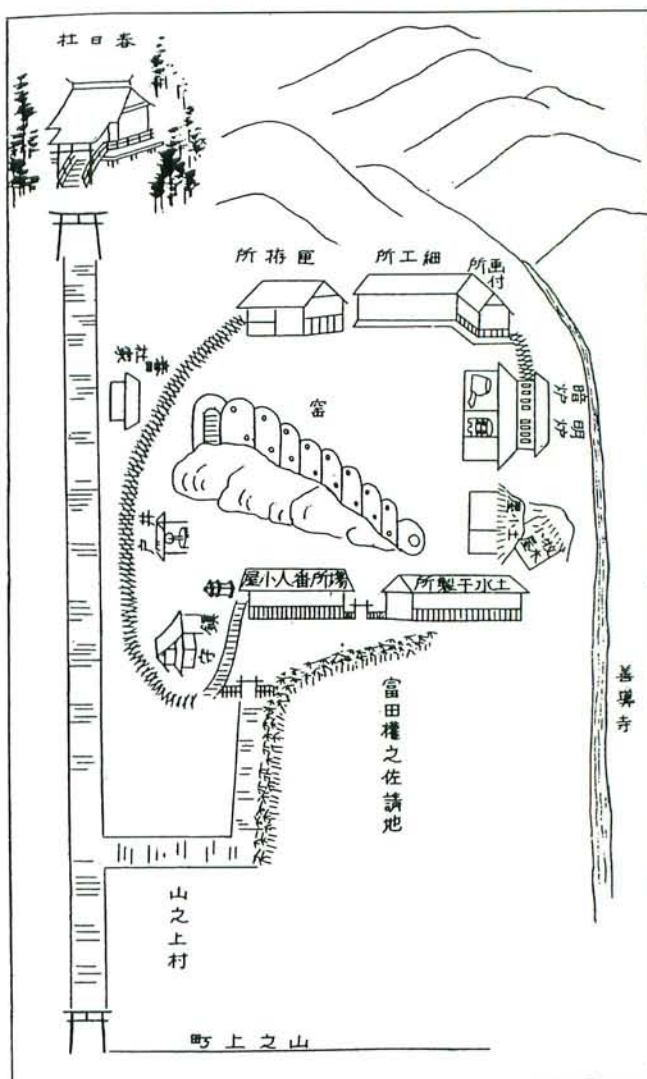


金澤九谷陶宗木米窯跡の石碑。昭和36年春、森山町公民館と金沢陶業団有志が建立。

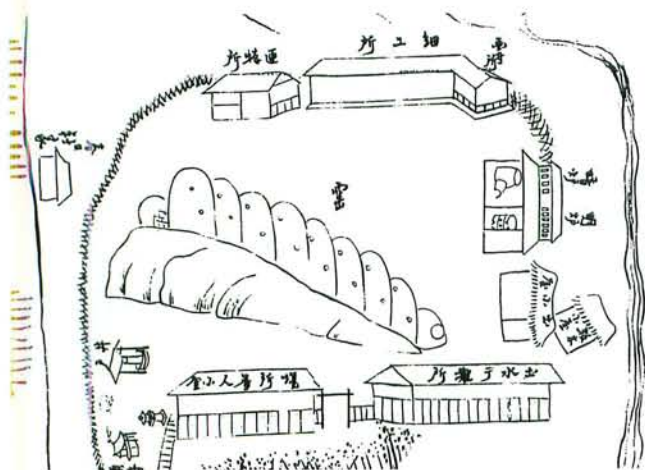
図1 春日山窯跡位置と採集匣鉢レンガ片等



春日山陶器場所図(和田文次郎編『稿本金沢市史工芸編第1』1925年, 金沢市)。和田は前田家で当時の図面を見たとのこと。細部が省略気味であり和田が描いた図のようである。



春日山陶器場所図(木村弘道「青木木米と春日山窯」『金沢美術工芸大学学報』6:1-22, 1962年)。木村は、原本は前田家にあるよしで、原本の描かれた時代は「富田権之佐請地」と書き込んであるから、原図は富田景周の在世当時、文政11年以前に描かれたと推定している。



春日山陶器場所図(金沢市立玉川図書館蔵)部分。昭和17年1月13日、侯爵前田家蔵の図を謄写したものと木立雅朗は推定している。木立雅朗「京焼の上絵窯について」『金沢大学考古学紀要』26:120-132, 2002年。



金沢卯辰山工芸工房の戸出雅彦氏が卯辰山(茶臼山)で採掘した陶土。

図2 春日山陶器場所図と春日山採集陶土



図3 春日山窯の色絵陶磁器 すべて金沢市卯辰山芸工所蔵



金沢市卯辰山工芸工房所蔵



金沢市卯辰山工芸工房所蔵



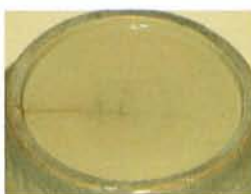
呉州絵写牡丹文鉢「春日山」銘

金沢美術工芸大学所蔵



陶器色絵向付「春日山」「金城」銘

金沢市卯辰山工芸工房所蔵



「文化年製」銘
金沢市卯辰山工芸工房
所蔵

青磁鉢「金城」銘
金沢市卯辰山工芸工房所蔵

「金城製」銘
金沢市卯辰山工芸工房所蔵

図4 春日山窯の色絵陶磁器